

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

## ターミナル

小六・荒木 凜子

「こんな小さな島から、どこに行けるっていうのよ。」

りんはこの島が好きだ。小さくて歩いて半日くらいで一周できてしまおうし、島民もみんな、顔見知り。きゆう屈だっていう人もいるけど安心感があるっていうか、きらいじゃない、この感じ。だから、急に二分の一人式をやるから、二十才の自分にむけて世界にはばたく夢を作文に書いていわれても、困ってしまう。

別にこのままでもいいし。どうせ世界につながる壮大な夢なんて、見つからない。この島でのんびり暮らすのだけじゃ、いけないのかな。グダグダ考えていても、仕方ない。りんは気晴らしに、島を散歩して回ることにした。今日は船が出る日だから、島の港は忙しいよね。港の反対側へ向かってりんは出発した。そろそろ休憩かな、という所でりんのお気に入りのお気に入りの大きな岩がある。座るのにちょうどよく、海沿いであって眺めもいい。今日は珍しく先客がいた。りんはそつと隣に座った。

金のししゅうの帽子に、金ボタンのついた紺色のジャケット。白い豊かなヒゲに、くわえているのは、パイプかな？ 会ったことがない人が、まだこの島にいたんだ。りんの視線に気づいたのか、りんの方を向いて、話しかけてきた。

「こんにちは。おじょうさん。」

「こんにちは。私はりん。はじめましてよね。もしかしてその格好は、船の船長さん？」

---

「わしは、ターミナルの管理人じゃよ。」

「ターミナルの管理人？　どんなお仕事？」

「そうじゃなあ。説明するのは難しいのう。まあ、出発を見守ると  
いうか。」

「それだけでお仕事になるの？　ねえどんな人が来る？　お話しと  
か聞ける？」

「いろいろな人が来て、いろいろな所へ旅立っていくよ。様々じゃ。  
全く同じ道に行くことは、ほとんどないのう。」

「ええ。そんなに？　この小さな島からそんなにたくさん  
の船って出てたっけ？　ねえおじいさん、どこへ行けるの？」

「どこへでも。行き先をわしが知っているわけないさ。わしはただ  
見守ってるだけじゃ。」

「行き先もわからない船に乗せるなんて、無責任じゃないの？　迷  
子になったらどうするの？」

「迷子になるのも、時にはいいものじゃのう。まあ、道は自分で進  
むものじゃから、そもそも迷子というか、休憩しているだけじゃよ。  
今みたいにね。おじょうさんは、道順がわかっている船を探してい  
るのかい？　わしからすると、ちよつと退屈じゃのう。まあ、目的  
地はあってもいい。でも、どういう道をすすむかわからん方が、ち  
よつとドキドキして、ドラマチックだと思わんかい？　けっこう何  
とかなるものさ。」

「うーん。確かにちよつとワクワクかもしれない。その船、どうや  
って乗るの？」

「その気になれば、いつでも乗れるさ。」

「えっと、木に登れば乗れるって言ったの？　船なのに？　どんな  
木？」

---

「だからわしの仕事は、見守ることだと言っておるじゃろ？ 答えがある問題を、おじょうさんは探しておるのかい？」

「えーっと。何だか私もよくわからなくなってきたわ。さてはクイズみたいなものかな。明日までに解いて、びっくりさせちゃうわ！」  
「ふふふ。見守るのも、けっこうハラハラドキドキじゃよ。」

不思議なおじいさんだったな。何だか面白い事を教えてくれたよ。うな、何も教えてくれなかったよ。うな。りんは、その日は早くにベッドに入った。行き先は、どこへでもって言ってたな。この前授業で、温暖化の影響で水位が上がる都市があるって言ってたな。ベネチアだっけ。沈む前に行ってみたいな。あれ、地球ってつながっているし、日本はどうなのかな。海水温が上がって潮の流れが変わって魚がいなくなったとか、港で話しを聞いたな。ベネチアを見に行くことを考える前に、地球温暖化を止める方法を考えた方がいいかも。あれ、クイズじゃなくなっちゃった。

じゃあ、他の場所で考えてみよう。そうだ、伊豆大島とか？ 同じ島同士、こないだ協定を結んだとか言ってたわ。でも不用意な人の往来で外来種の持ち込みがあつて、絶滅危惧種がでてきているとか。島を訪れるルールを、行く前に検討しなくちゃね。でも島は観光業で生活している人も多いし。自然の保存と観光業が両立できるいい方法を探さないと。

どこ行きの船に乗るかいろいろ考えているうちに、りんはいつの間にか眠ってしまった。目が覚めると、りんは岩へと向かった。昨日と同じ所に、おじいさんは座っていた。

「あの、私、どこ行きの船に乗るか考えてみたの。世界は広いわ。でも、世界はつながっていて、私のすぐ側でも取り組むべきことが、たくさんあるのよ。この島だって、浜辺に流れ着いたプラスチック

---

を拾うとか。そういう取り組の先に、次の目的地が見えてくると思うの。」

「おじょうさん、進みたい方向が決まったようじゃね。もう自分で出港できそうじゃな。わしもそろそろ次のターミナルに行かないと。」

「私、行けるかな。」

「どこへでも、その気になれば。きっとたどり着けるさ。」

おじいさんがそう言うのと、目の前に小さな船着き場が現れ、青い船がやってきた。

「おじょうさん、よい航海を。」

りにそう言って、おじいさんは船に乗り込み、船は輝く海へだんだん消えていった。

「さあ、まず宿題から。」

りんは家に帰るとえんぴつを手にとった。

「今の私の夢は、地球の一員として行動すること。二十才の私は、美しい地球に、たどり着けていますか？」

---